

巻頭
対談

都市美について 大阪のまちは美しいか？



橋爪 紳也
はしづめ・しんや

1960年大阪市生まれ。京都大学工学部建築学科卒。同大学院および大阪大学大学院工学研究科博士課程修了。現在、大阪市立大学都市研究プラザ教授。イベント学会副会長。財団法人大阪21世紀協会企画委員。建築や都市の生活文化を中心に横断的に研究、まちづくりを実践する。「日本の遊園地」「大阪モダン」など著書多数。「にっぽん電化史」でエネルギーフォーラム賞優秀賞受賞。近著に「あったかもしれない日本」「絵はがき100年」などがある。



中島 直人
なかじま・なおと

1976年東京都生まれ。東京大学工学部都市工学科卒業。同大学院修士課程修了。同大学院助手を経て、2007年4月より助教。博士（工学）。都市計画、都市デザインに関する研究を進めつつ、市民主体、住民主導のまちづくりの手伝いに精を出している。共著に「景観法を活かす」、「都市美」、「近代大阪と都市文化」など。日本建築学会奨励賞、花王芸術・科学財団美術に関する研究奨励賞等を受賞。



「近代大阪と都市文化」清文堂

きしたい。私には以前から不思議に思っていることがあって、わがまちはきれいだと言われている。誇りを持って言う大阪の人は少ないんです。だけど、海外の人や東京の人が、例えば中之島の公園を見て、「素晴らしい」、「美しいまちだ」と言う。OBPのホテルニューオオタニの方から見た大阪城は、幾筋も堀と川が重なって、ほんとうに歴史的な水の都の風景だ、とか。絵葉書的にも知れないけど（笑）、確かに美しい。御堂筋も建物の高さが制限されていて、あれほど一直線の銀杏並木があるメインストリートは世界中探してもない。それらの風景は本当に美しいと私も思うのですが、大阪に住むわれわれは、海外に行くと、パリとかヨーロッパの古いまちは美しいと言われ、対して大阪は美しくないと言われ、乱雑に駐めた自転車が路上にあふれている。違法駐車も目につ

都市美運動に関する研究

橋爪 今回は、都市計画が専門の東京大学の直人さんをお招きして、戦前の大阪のまちの美観について、お話を伺いたいと思います。早速ですが、中島さんの博士論文のタイトルを教えてください。

中島 「都市美運動に関する研究」です。

橋爪 中島さんは、日本における「都市美」という概念について、都市計画の立場から歴史的アプローチをされています。海外の都市美運動の事例を紹介しつつ、かつて日本の専門家たちが都市の美しさについて真剣に論じた時代があり、それが色々なまちづくりに反映されたことを明らかにしています。都市美については戦前盛んに議論され、都市美協会という組織もできて、各地でいろいろな啓蒙活動を行っている。それがうまくいったかどうかについては後でお聞きします。また、東京や大阪など、それぞれ独自の都市美運動もあった。大阪の都市美運動については、昨年出版された「近代大阪と都市文化」（清文堂、6200円）に詳しい論考を書かれています。その内容についてもお聞きします。また、都市美運動は戦争のために一度断絶していると思うのですが、現代の都市計画の専門家である中島さんには、「今日の日本の都市は本当に美しいのか？」ということもお聞

消えた「都市美」

く。電線が空を覆っているとか、看板がやたら多いとかといったこともあるのでしょうか。わがまちは美しくないと考えがちだ。何をもちえて美しいとするかは相対的で、近代化の中で現れてきたものだとも思うのですが、その辺りについてもいろいろ伺っていきたいと思います。

橋爪 まず初めに、いま、景観法がいろいろと議論されていますが、そもそも都市美というのは日本においてどのような議論のされ方をしてきたのでしょうか？

中島 皆さんご存知のように、2004年になってようやく景観法ができました。しかし、振り返ってみると、都市計画の中には美という概念が今まではほとんどなかったと思います。

橋爪 確かに都市計画法の中には、美という言葉自体ありませんね。

中島 ええ。どうして美という言葉や概念がないのだろうと思つて歴史を遡ってみました。私の博士論文でした。都市計画法は大正時代にできた法律です。その制定より少し前の明治末くらいには、建築家の方たちを中心に、美しい都市を目指すという意見が多数出されて、そういう気運が高まっていたのです。しかし、なぜか都市計画法ができあが

る段になって、都市計画の中から美という言葉がなくなりす。

橋爪 つまり、都市計画法ができるときに、「美しいという「夢」や「理想」が消えてしまうというわけですね。

中島 建築家が理想として語っている段階ではいろいろと夢を見られたのでしようが、いざ社会制度になるときに、例えば大蔵省が反対した。美しい都市をつくるための都市計画なんかに大切な国費を出すというわけにはいかない。

橋爪 都市は経済活動の場であって、美しいとか醜いというのは金にならん(笑)。

中島 都市計画家とか建築家は美をやりたいたいだけ、そればかりを言ってしまうと、都市中心部の過密化や無秩序な郊外化がもたらす弊害の解決といったそもその都市計画の目的までもが誤解されてしまい、結局、都市計画ができなくなってしまうと心配して、「美」をひっこめたというのが実状のようです。ただ、もともとあつて泣く泣くひっこめた美が、いつの間にかもともとなかったものとなつてしまった。

橋爪 なるほど。ヨーロッパの都市計画なんかには理想としての美という概念はあつたんでしょね？

中島 あつたと思います。

ゴミや電線がないようなものが美しいとされる一方、大八車があつて、木の電柱が斜めに立っていて、看板があつて、舗装していないような道なんかは醜いと。でもそれは、かつて日本のどこにでもあつたあたりまえの風景で、それが醜い側の方に選ばれてしまつている。それに対して、ヨーロッパやアメリカの近代都市のようなものを美しいと、専門家は言うようになる。

中島 そうですね。ただ、当時の都市の風景はほんとうにすごい混乱ぶりです、今と違っていろいろな配線によって電柱が別個に建てられていたりするので、醜いというよりは、ほんとうに乱雑な印象を受けます。

橋爪 確かに。

中島 あと、大正くらいから都市化が進んで、都市の中の美しい自然が改変、破壊される。それで都市美と言われだすというものがあります。破壊されて、初めて気づく。そうして、都市美運動の基盤ともいうべき意識が徐々に醸成されてきていたのです。

橋爪 前の時代に風致だと言われていた風景が、どんどん破壊されていったんですね。

中島 そして、1923年に関東大震災が起き、焼け野原になってしまった東京において、再び美という「夢」や「理想」が表舞台に出てきます。つまり、都市美運動が始まるのです。

原風景としての「風致」

橋爪 どうして都市美について研究しようかと？

中島 私が生まれ育ったところは東京の西郊にある杉並区善福寺というところなんです。まちの真ん中に武蔵野の面影を残した善福寺池を抱える住宅地です。大学の卒業論文に取り組む機会を利用して、自分の原風景である善福寺のまちがどうやってできたのかを調べていくうちに、そこが都市計画で守り育てられてきた地区だということを知ったのです。昭和の初めに、都市内の豊かな自然を守り育てていくための風致地区に指定されていたんですね。

橋爪 なるほど。

中島 さつき、都市計画に美という言葉はないと言いましたが、実は「風致」という概念は持っていました。今はあまり使われないかも知れないですけど、単なる見た目としての「風景」だけではない、「風雅」とか「風流」にも似た「趣」を大切にしたい美意識を表す言葉でした。そういう概念が実は都市計画の中にはあるんだということ、偶然にも故郷のまちから学んだのです。

橋爪 風致を守る地区に住んでいるという実体験があつたわけですね。

中島 それで、「風致」から始めて、都

シテイ・ビューティフル運動

橋爪 日本の都市美運動の先例とも言えるアメリカのシテイ・ビューティフル運動はいつごろですか？

中島 1890年代くらいに始まって、1900年代に一番盛り上がり、1910年代に衰退していきます。

橋爪 ああいう運動ができた背景についてのは何でしょうね？ 宗教的なモラルとか。

中島 ええ、それもあります。19世紀後半のアメリカではボス政治家に実権を握られ腐敗していた市政の改革を目標とする市民運動が盛んだったのです。「シビック・プライド」や「シビック・パトリオティズム」の醸成がキーワードとされ、自治体の機構改革から始まって、公共施設や住宅の改善までが改革の対象となりました。米西戦争の勝利あたりから社会的緊張も解け、利他的な共同意識や社会介入、社会派キリスト教などが回復してきて、そうした背景のもとで、自分たちの都市を美しくしようといった運動が起こります。都市を美しくするというところに、お金をかけるようになるんですね。

橋爪 具体的な実践としては、どういうことが？

中島 屋外広告の規制推進や公共の広場

市計画の美意識についての研究に熱中し出したのです。

都市美と都市醜

橋爪 「都市美」という言葉はいつごろからあるのですか？

中島 「都市美」という言葉は、大正の初めくらいには出てくるんですけど、それ以前から、だいたい明治の半ば頃から都市の美しさが「美観」とか「風致」という言葉で語られるようになっていました。特に、どこか堅い印象を受ける「美観」よりも、柔らかな「風致」という言葉が日本人の美意識としてはしっくりきたみたいです。例えば江戸城の外堀の美しさが「無類の風致」として評価されていきました。

橋爪 大正の頃に概念ができてくる。つまり、「都市美」とか「美観」という言葉が發明されるんですね。

中島 「都市計画」という言葉ができたのもほぼ同時期です。「都市」というものが、環境、機能、そして美などさまざまな面から、人々の関心の対象になり始めた時期なので、

橋爪 面白いのは、どういう風景を美しいとするのかということが、それ以前と変わりますね。「都市美」と「都市醜」という言葉があるけど、近代的な白っぽいビル群で、

等への彫刻の設置などもありますが、大規模に都市を変えたという点で代表的なのは、シビックセンターの造成でしょうか。

橋爪 シビックセンターとは、どういう施設ですか？

中島 広い道路と広い広場があつて、それらの突き当たりや周囲に新古典主義の公共建築がシンメトリーに並んでいる一帯のことです。

橋爪 そういったものが美しいとされたわけですね。

中島 その背景には、ヨーロッパへの憧れがありました。もともとアメリカは植民都市なので、首都ワシントンを除いては、殆どの都市がグリッド状の単調な都市だったので。アメリカが南北戦争を終えて余裕を持ち始めると、ヨーロッパの都市と比べて自分たちの都市がみすぼらしいのが気になり始めた。アメリカの国力があがってくる時期だったので、その国力にふさわしい都市にしようかと。

橋爪 なるほど。

中島 主に東海岸から始まったシテイ・ビューティフル運動は盛り上がり、全米に広がっていきますが、やがて反動がくるんです。美にはばかりお金を使つて、例えばスラム地区なんかは全然改善されてないじゃないかって。そこで、シテイ・ビューティフルに対して、シテイ・サイエンティフィック、あるいは

はシティ・プラクティカルといった標語が1910年代に生まれた。つまり科学性、実用性を重視する都市計画運動ですね。で、面白いのは、まさに日本はそのシティ・ビューティーの衰退期に都市計画法をつくらうとしていたんです。アメリカを見たら、もう美は時代遅れになっていて、これからはシティ・プラクティカルだぞ、という思想にものすごく影響を受けるのです。

橋爪 それでなのか(笑)。

中島 ただ、よくよく見てみるとアメリカでも美が駆逐されたわけではなくて、美のうえに実用もやりましょうという具合に両立していた。日本が読み違えたというのはありますね。

橋爪 つまり、もう少し早く日本に都市計画が入っていて、アメリカのシティ・ビューティーフル運動が盛んなころなら、都市の中心部にきれいな広場があつて、立派な建物が並んでいるような都市になっていたかもしれないと。

中島 そうですね。

緑化と空中浄化

橋爪 大阪における都市美運動は、どういう展開をしたのでしょうか？

中島 まず都市美運動は大正の終わり頃に東京で始まるんですが、大阪では少し遅れ



大阪都市美叢書 (1938年)

なみ整備とか、高さ制限とか、古いものを残しましょう、みたいなものを思いがちだけど、大阪の都市美というのは緑化と煤煙対策だったと。

中島 いや、少々誤解を与えてしまったかも知れませんが。大阪市は昭和の戦前期に都市デザインの傑作である御堂筋をつくっています。また、これは内務省や大阪府の仕事になります。大阪駅前や中之島一帯、御堂筋の沿道、上本町や天王寺などのターミナル周辺は都市計画の美観地区に、景勝地や社寺の

て始まります。当時の大阪はプライドが高いというか、「大大阪」を標榜し、自分たちは東京よりも進んでいるぞという気概があつた。東京でやっていないことを大阪でやるのと同時に、東京でやることを大阪ですぐやるというのがあつたように思います。最初の取組みは緑化運動です。大阪は昔から緑が少ない。江戸は大名屋敷という緑のストックがあつて、近代化以降もまちなかでもそれなりの緑が残っていたのですが、商人地が市街地の多くを占めていた大阪は江戸時代から緑が少ない。緑化というのは大阪にとって最大のテーマでした。1923年3月に大阪都市協会が緑豊かな美しい都市をつくらうと大阪緑化運動を開始します。具体的には、講演会やラジオ放送などを通じた啓蒙的な内容が主です。とにかく、緑を植えましょう、と。

橋爪 それは市民がみんなそれぞれ自分の家に緑を植えましょうってこと？

中島 ええ。実際に草花種子の半値販売会や植木廉価市なども同時開催しています。本気なんです。

橋爪 昔も今も変わらないという気がするなあ(笑)。

中島 昭和のはじめ、「大大阪」や「大東京」の時代は、まさに都市が大きくなってきて、市民のまとまりというか、市民にどうやって一体感を感じさせるかという課題が市政運営の上で出てくる。その時に、都市美

周辺、水辺など25地区を冒頭で話に出た風致地区に指定されていきました。建物のデザインとか高さをそろえよう、あるいは既存の都市の風致を守つていこうといった運動も確かにあつたのです。しかし、大阪市としてはそれをやるにはお金や時間がかかる。いまずぐやるべきは美しいものをつくるより醜いものを除くことだと(笑)。だから保健であり、公害対策だった。都市醜という言葉自体は東京で生まれたんですけど、一番流行つたのは大阪みたいです。

橋爪 現実的で、大阪らしいという感じかな(笑)。

中島 大阪を弁護するわけではないのですが、市長だった関一のリリーディングもあり、美しいものをつくっていくという面でも大阪は進んでいたと思います。戦前、全国都市美協議会というのが開かれて、全国の都市計画関係者が景観について議論したり発表したりしていましたが、大阪の人々は積極的に参加していました。ただ、第一回は東京で開かれ、第二回が大阪だったんですが、その第二回協議会のテーマは、やはり「健康都市の建設」になつてしまふわけです。

橋爪 「健康都市」ということばは、藤原九十郎がつくつたんですね。

中島 そうだと思います。第二回協議会の参加者の声を拾ってみると、「これが都市美なのか?」「都市美なのになんでこんなこ

たいなものがあるんじゃないかって。都市が美しければ皆愛するだろうと。自分の都市を愛しましょう、そういう標語のもとで美しい都市をつくっていく。都市美運動は、当時の大都市化という課題と密接な関係を持っています。

橋爪 大阪の都市美運動を支えた組織とか、中心になった人にはどういう人がいるんです？

中島 関一が大阪市のシンクタンクとして設立した大阪都市協会が中心でした。しかし、大阪の都市美運動は他都市と異なっていて、緑化運動から始まったものの、次第に空中浄化運動、いわゆる煤煙防止や河川浄化という公害対策の方向へと展開していく。

橋爪 当時の大阪は「煙の都」と呼ばれて、煤煙をどんどん出すのが産業都市の活力やと自ら誇りにしていた。でも、それにもほ

どがあるやろと(笑)。

中島 大阪都市協会とともに都市美運動を支えたのは、当時、そうした公害対策を行っていた大阪市の保健局だったのです。保健局には学位を持つていてる学者役人がいました。藤原九十郎というのですが、日本の都市衛生という分野を切り開いた方の一人です。要するに彼が推進したので、都市美運動はどんどん、健康的な都市をつくりましょうという方向に進んでいくわけです。

橋爪 われわれが都市美というと、まち

とをやっているんだ」という感想は少なかつたみたいです(笑)。

橋爪 今から思えば、当時の大阪は工業化に走り過ぎ、最も環境が悪かつた都市だから、環境問題には敏感だったんでしょね。

大阪の愛都心

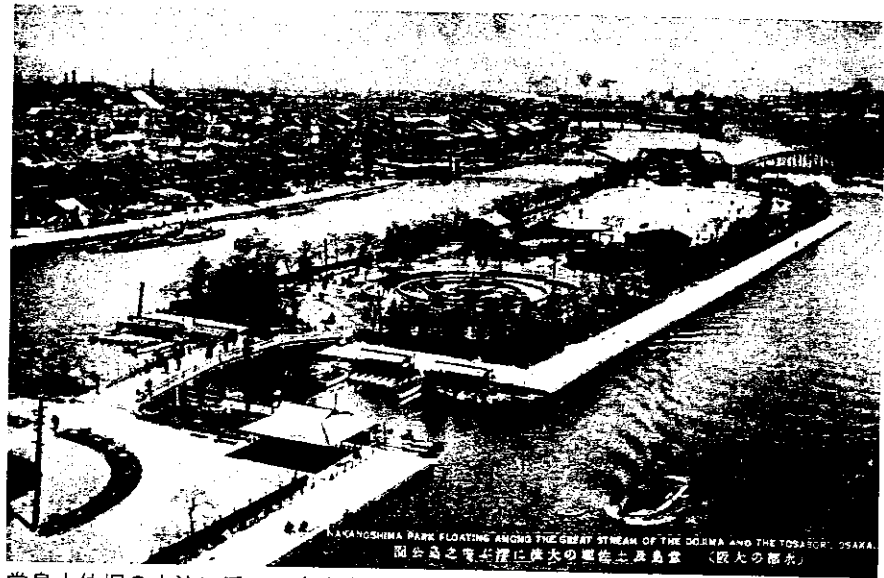
橋爪 東京の都市美運動を議論するときには、「帝都」の顔として、どんな都市景観をつくるべきかという論点が浮かぶのだけども、大阪にはこんな都市をつくるんだという目標はあつたんでしょうか？

中島 あつたと思いますが、それはもちろん大日本帝国の「帝都」の風景ではなくて、「わがまち」の風景としてあつたと思います。東京の都市美協会の機関誌に「都市美」の21号(1937年8月)、「他都市より見たる帝都の都市風景」という座談会があります。そこでは東京と大阪との興味深い比較が語られています。

橋爪 新潟、愛知、石川、京都、神戸、川崎、堺などから担当者が集まって、東京を見て、ここはきれいだとかここは汚いとか言い合っている座談会ですね(笑)。

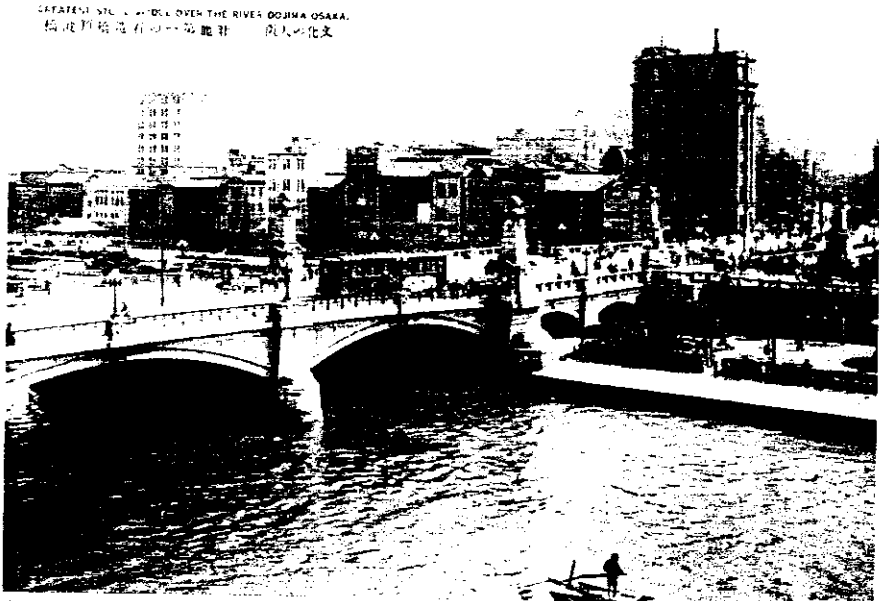
中島 そこで大阪がいいという話が結構出ています。例えば、出席者の一人に大阪にある日本建築協会の亀井幸次郎という人がいます。彼は東京で働いた後、大阪に移つたば

かりだったので、彼が言うには、大阪人が大阪を愛する心、つまり愛都心あいとしんですね、その愛都心が東京とまったく違う。東京で大阪のことを悪く言うのは普通なのに、大阪で大阪のことを悪く言うのは怒られると（笑）。また、風景についても亀井は、中之島あたりは特に美しいと絶賛します。ああいう風景は東京にはない。大阪にはしっかりと顔があると。橋爪 資料を読んでみましょう。「大阪人ほど大阪市を愛している市民はないと痛切



堂島土佐堀の大流に浮かぶ中之島公園（橋爪紳也コレクション）

に感じました。大阪の悪口を言おうものなら船場のあんちゃんから大阪の府庁のお役人まで、大阪の良さを強調してやまない。ところが、その愛都心を植え付ける中心はどこにあるかというところ、やはり中之島を中心とするところであります。水があり緑があり、そうして大阪市庁舎を中心にしたシビックセンターがまがりなりにも中心をなしております」。中島 亀井はそう言って大阪を褒め称えたあと、東京を批判するわけですけど、これ



壮麗第一の石造橋難波橋（橋爪紳也コレクション）

は亀井のお世辞ではなくて、当時の大阪には実際そういうシビックセンターの風景があったのだと思います。大阪の中之島のように、河川の風致と市庁舎や公会堂といった近代建築の美観とが一体となったシビックセンターは、他の都市にはなかった。東京にもなかった。橋爪 中之島と大阪城周辺は非常にシンボリックですね。アメリカのシテイ・ビュートイフル運動でつくったシビックセンター的なものを、大阪はつくった。



中之島中央公会堂（橋爪紳也コレクション）

中島 もともと大阪を愛する心を育てるという目的で設立され、大阪の都市美運動を推進した大阪都市協会は今も健在で、設立八十を超えました。ただ大阪の都市美は、大阪都市協会や大阪市が生み出したというよりも、亀井が述べているように、大阪人の大阪という都市への強い愛着や愛情が生み出したものだったと思います。

商店街の美化運動

橋爪 ところで、中島さんは盛り場の研究者でもあります。商店街や商業地区でも都市美はかなり意識され、現在だと店の前を掃除しようとか、そういうのが美化運動だとされますが、戦前から商店街などで美化運動はありましたか？

中島 橋爪先生の方が詳しいでしょうが、昭和の初めくらいの大阪だと、堺筋会の取り組みが興味深いですね。大阪市のお金で立派な御堂筋がだんだんとできあがってくるのを横目に、堺筋の人たちはプライドもあって、自己資金で、ものすごいお金をかけて照明灯を揃えて、美しいまちをつくらうとします。

橋爪 博士論文の中で、当時の朝日新聞の記事を中島さんが紹介されています。読みますね。「大阪の銀座堺筋の美化。まず照明灯を増して街路を明るく瀟洒に。415基の

照明灯を4万円あまりで建設した」。

中島 ただ、この話には後日談があります。照明には建設費だけでなく、維持費が結構かかるのですが、堺筋ではお金が続かなくなるんです。それは、費用を沿道の商店で頭割りにしたからで、堺筋沿いのお店が御堂筋沿いに移っちゃって堺筋に空き家が多くなると、一戸一戸の費用負担が大きくなっていくんですね。困ってしまっって、最後は大阪市に買い取ってくれと請願（笑）。

橋爪 ああ（笑）。中島 堺筋の美化運動はあまりうまくいかなかったんですけど、他には、上福島聖天通と浄正橋通の商店街なんですけど、台風の際に看板が全部飛ばされちゃって、直すときに看板全部を白地に黒文字で、商店街組合のマークを金色であしらったものに統一する。今でも各地の商店街が同様の取組みをやっていますが、最初にやったのが上福島商店街でした。統一看板は非常に美しいと評判もよかったです。大阪はいろいろとアイデアをもってやっています。さすが商人のまちだけありますね。都市計画技師で、商店街盛り場研究の第一人者であった石川栄耀いしかわえいようも、この看板統一による都市美化を特筆すべき事例として紹介していました。橋爪 石川栄耀は戦前の盛り場研究の権威で、震災復興とか戦後復興の中心的存在と

なった技師です。新宿歌舞伎町の計画を描いたことで有名ですね。その盛り場研究の第一人者が大阪を誉めていたと。

大阪のまちは美しいか？

橋爪 中島さんには勉強会などで、ときどき大阪に来て貰っているんですが、大阪のまちを見てどう思われますか？

中島 東京と比較させてもらうと大阪の特徴がよく分かります。江戸と大坂、城下町の設計の違いが現在にも引き継がれていて、大阪の中心部では、御堂筋だけではない、全ての街路が格子状になっています。また、地形もほぼ平坦ですね。電線、電柱類はこうした街路の整然さを無視するかのようになり、乱立乱舞していますが、街路景観はすっきりしている印象がありますね。

橋爪 なるほど。中島 よく大阪はゴチャゴチャしていると言われますけど、それは表にくつついていいるものがゴチャゴチャしているだけで（笑）、基本的な建物の形とか並びとかは揃っています。東京は地形が複雑で、その複雑な地形に合わせて街路も折れ曲がりたりしているの、街路景観も良く言えば重層的で奥深く、悪く言えばカオスになりがちなんです。しかし、大阪の中心部はそういう点では比較的揃ってきれいな方だと思います。ただ、こ

れも別の言い方をすると、まちなみとしては単調軽薄で、あまり面白くないとも言えますね。

橋爪 船場界限とか？
中島 ええ。船場は実はよく整っているまちなみです。ただ、分かる人には違いが分かるのでしようが、ぼつと見た感じではどの街路の景観も全部同じに見えてしまつて、自分がどこにいるのか分からなくなる。地形とか、そういう道に個性を与える手がかりがありませんから。



船場現況1 (筋)

橋爪 「単調さ」というのは「統一感」があるということでもありませんね。それは「美しい」と言えるでしょうか？

中島 うーん、難しい問いですね(笑)。ただ、「統一感」と同時に、「単調さ」の反対での「多様さ」を持つことは可能ですね。つまり、大枠はだいたい統一されていて、全体としてのまとまりが美しいが、その一方で個々の建物の意匠はそれぞれに个性的であるという状態です。都市美運動のときは「統一感」ばかり強調されていましたが、戦後、日



船場現況2 (通り)

本の各地の宿場町や城下町などの歴史的な町並みの再評価から学んだのは、そうした美しさだったと思います。

橋爪 去年の秋に、フランスのル・アーブルというまちに行つたんです。ル・アーブルは第二次世界大戦中、ドイツ軍が占拠していたまちで、アメリカ軍とイギリス軍の空爆で壊滅してしまつた。戦後復興でオーギュスト・ペレという建築家がマスタープランを描いて、鉄筋コンクリートの公営住宅や市役所、教会などを建てて、全部を鉄とコンクリートのビル街として非常に整つたまちをつくつた。だけど、同じようなデザインのビルが立ち並んでいるまちを、向こうの人たちは美しいとは思っていません。彼らにとって美しいはなにかというと、それは歴史的なフランスの古いまちなみがあるところ、例えば空襲を受けても戦前の写真などを見て昔風の木造の建物になおすようなまちなみなんです。これはたぶん、まちに対する愛着があつて、歴史をそのまま復元したからなのかも知れないけど。

中島 ええ。

橋爪 そのル・アーブルがですね、一昨年に世界遺産になつた。その評価のひとつが、「コンクリートのポエジー(詩学)」というものでした。地域の人はあまりにも近代的でモダンなビルで、整っているかもしれないが美しいという概念にはあたらなかつたわがまち

が世界遺産になつて、これをあらためて自分たちの郷土の誇りとして考えようとし始めた。つまりなにが言いたいかというと、御堂筋であるのが近代建築が並ぶ風景であろうが、最初は評価が低いかもしれないけど、統一感のある風景っていつか評価が変わることがあるんじゃないかということなんです。

中島 例えば、船場の都市景観は、堺筋沿いを中心に昔からある煉瓦タイルが明らかに目立っている近代建築があつて、その間を昔は町家がうめていたんですが、今は昭和30年代から50年代くらいに建つたいわゆる四角いビルに置き換わっています。その多勢を占めている四角いビルの大きさや大まかな形がだいたい揃っているんですね。ただ、よく見てみるとそれぞれ工夫しているというか、一軒一軒全然違う。やたらに個性を主張する近代建築ほどは分かりやすいんですけど、よく見ると、かべの素材に結構いいものを使っているとか、窓枠のデザインがかなり凝っているとか。全体としては統一感があるんだけど、一戸一戸を見ていくと、ちよつとずつこだわりが見えます。

橋爪 「粋」という感じかな。

中島 そういう意味では、見る目がある都市景観も味わい深く、また粋に見えてくる。最近思うのは、景観は見た目じゃなくて、見る目だけということ。見た目だけじゃなくて見る目をもって見ると景観的な特徴や価

値が分かつてきて、一見単調だった船場のまちなみが意外と面白いなあと思ってきてます。そうした見る目こそが、実はまちへの愛着につながり、まちづくりの力を生み出していくような気がしています。

橋爪 整つていて横と同じようなビルが並んでいるからこそ美しいという認識を、われわれはどこかで覚えるんだけど、隣と違うからこそ面白いという評価もできますね。盛り場の風景はまさに、いかに隣よりも違う店構えにするかというような自己主張があつて、そのへんは大阪らしいというか。

中島 まあ、盛り場はそれでいいと思いますけど、ビジネス街や住宅街でも同じような考え方で、奇を衒うというか目立とうとするのがあります。ああいうところは目立とうとするのではなくて総和としてよくなったほうがきつといい環境になりますね。

橋爪 上海とかドバイとかすごいね。ビル一つ一つのデザインがぜんぜん違つていて、それがわがまちの良いところだと言いつける人たちがいる(笑)。

中島 日本的な美意識からいうとちよつと違うなあと思います。船場のようなああいうのが実はいいなあと思いますね。極めて人工的な景観ですが、そろそろ年季も出てきて、どうも「風致」の域へと進みつつあるような気がしています。ただ、船場も最近では変わってきていますね。高層ビルも建つてきてるし、

マンションも目立つ。高層マンションのなにか問題かという点、全体的なまとまりとしての景観を一撃で壊してしまう点でしょう。もちろん、現在の状態だけがまとまりのある唯一の状態ではないと思いますが、現在の高層マンションはたまたま敷地が広くとれたところに個別的に建設されているだけで、まちとしてどういう景観を目指すのかというビジョンとは関係がつけられていません。ただ現在の都市景観が壊されただけで、いつまで経っても新しい、まとまりもあつかつ多様性もあるような風景は生まれません、という状況に陥るのを危惧しています。まちの風景について見る目を養い、その過去と現在を理解した上で、愛情を持って将来について考えていくという姿勢が有るかどうかが、まちの美しさを決めていくのではないのでしょうか。

編集部 「都市美」という概念をめぐって、今回はより一層内容の濃い巻頭対談となりました。いま、大阪のまちなみは大きく変わろうとしています。経済一辺倒ではないまちづくりが行われることを願いつつ、本日はこの辺で終わりたいと思います。ありがとうございました。

平成19年1月23日。空堀の交流スペース「にぎわい堂にて」。次回のゲストは、浄土宗應院主幹の山口洋典さんです。